

# インターネットの教室利用をさまたげるものは何か

## - テクノロジー vs. 教授・学習文化 -

What is the Obstacle to Classroom Uses of Internet: Technology vs. Teaching-learning Culture

大谷 尚  
Takashi OTANI

名古屋大学大学院 教育発達科学研究科

Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

**<あらまし>** インターネットの教育利用は、教授・学習文化とのコンフリクトを生じる。教室のテクノロジーは、一斉授業に適合するものだけが成功し、受容されても文化的に変容したものもある。インターネット利用を成功させるには、従来の教授・学習文化を解体し新たなそれを創る必要がある。

**<キーワード>** インターネット、授業実践、学校文化、教授・学習文化、文化変容、質的研究

「それは何人でも帰依するでしょう。ただ帰依したと云う事だけならば、この国の土人は大部分悉達多（シッダールタ）の教えに帰依しています。しかし我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」（ ）内は引用者。

芥川龍之介「神神の微笑」から

### 1. はじめに

インターネットを効果的に教育利用するためには、それを見えない形で損なう教授・学習文化とのコンフリクトに着目する必要がある。以下、それについて述べる。

### 2. インターネットによる学校文化と学校外の文化とのコンフリクト

以下にまず、学校文化と学校外の文化とのコンフリクトで生じた問題の例を上げる。

ある小学校で児童の絵をインターネットで公開して学校外から意見を求めた際に、特定の絵に意見が集中して人気投票のようになる恐れが生じた上、子どもを傷つける恐れのあるメッセージもあった事例（大谷 1997a）

ある中学校でゴミ処分問題についての生徒の討論をホームページで公開し、学校外からも意見を書き込める掲示板を設定したところ、政治的その他の不適切なコメントが書き込まれ、公開し続けられた事例（大谷 1998）

ある小学校のインターネット利用が週刊誌で不適切に紹介され、教師がそれをメーリングリストに投稿したところ、そのアーカイブを検索され、そのMLが児童ポルノ関連のものと誤解されて不適切な要求が複数投稿された事例（大谷 1998）

### 3. 教授学習文化とインターネット利用とのコンフリクト

ところで日本の学校教育の内容は、きわめ

て系統性が高く、学習目的に応じて単元として区分されたうえ、おもに教科書という統制・限定されたメディアを通して最大限に整理された形で提供され、しかもそれが全国的に統一されているという、固有の強い特質を有する。そして日本の教授・学習方法は、あくまでそのような学習情報を前提としたものとして開発され、発展してきたのである。

いっぽうインターネット上の情報は、本質的に情報発信の目的が多様で情報は規格化されていない。したがって、学習のための情報取得にインターネットが使われる際には、従来の教授・学習文化とのコンフリクトによる問題が生じることが、実際に観察されている。

たとえばつねに問題になるのが、未習内容（たとえば未習漢字）の存在である。インターネット上では、発達段階に応じて系統的に情報が配置されていないため、それは当然である。しかしたくさんの未習内容に立ち向かって学習を進めていくスキルは、従来の教授・学習文化では要求されなかったため、教師も子どもも、適切に対応することは難しい。

また情報提供の不統一さもインターネットの特質である。筆者は、野鳥が自然環境で食べるものをインターネットで調べる授業で、ある児童が「牛脂」という情報を得て発表したのを観察した。しかし牛脂は人間が給餌するもので自然に存在するものではない。にもかかわらず、クラスの全員と教師はその問題を指摘しなかった（大谷 2001）。「牛脂」は誤情報でも有害情報でもないが、この場合の情報取得の目的には適していない。この事例は、教科書による統制され整理され極度に洗練された学習情報を前提とした従来の学習スタイルが、未整理で多様な情報の混在するイ

インターネットの世界からの情報取得に有効に機能しなかった例だとみる必要がある。その点でこれも、旧来の教授・学習文化とインターネット利用とのコンフリクトと考えられる。

#### 4. 教室のテクノロジーの成功と失敗

ところで教室にはこれまで、多様なテクノロジーの導入が試みられた。それらは明治時代以来の机と椅子、掛け図、教壇、黒板とチョーク、教科書、ノートなどの他、戦後になってからのテレビ、ビデオ、レスポンス・アナライザ、プログラム学習、CAIなどである。しかしこれらのうち成功したもの、少なくとも広く普及して現在も使われているものは、ビデオまでである。結局、成功したものは、一斉授業の枠組みに適合しそれを強化するものであって、成功しなかったものは、その枠組みを全体的・部分的に解体するものである。つまり一斉授業を尊重する教育現場の価値観や従来の教授法に、いいかえれば旧来の教授・学習文化に適合するかどうかで成否を決める。したがってインターネットも（アメリカで実際に行われているように）教師がURLをクラス全員に示し、そのページを印刷させて読ませるような利用なら、広く普及して残るだろう。しかしその場合、CD-ROMと比較するメリットは速報性くらいである。

#### 5. 受容されたように見えるが文化変容したテクノロジー

しかも、さらに注意しなければならないことがある。それは、あるテクノロジーが導入され普及したかに見えるが、文化的に変容してしまった例が過去にあるからである。たとえば、「授業目標を目標行動として記述すること」が、教育工学的な授業設計として1970-80年代に広められた。それは、plan-do-seeを実施するためには目標の達成が外見的に評価できる形で目標記述がなされるべきだとの考えに基づく。たとえば「上皿天秤で物の重さの量り方が分かる」という目標では、それが達成されたかどうかの判断が困難だが、「上皿天秤で物の重さを量ることができる」とすれば、達成されたかどうかは実際に量らせてみればすぐに分かるという考え方である。

これは当時広く行われたが現在ではその意義が忘れ去られ「できる」という記述方法だけが文末に残っていることが多い上、しばしば「...を分かることができる」という矛盾した記述にさえ出会う。そもそも目標の達成の客観的な評価は、個別にしか行えない。し

たがってこれは、個別学習の目標記述のテクノロジーである。それを無自覚に一斉授業に導入したため、すぐには排除されなかったが、長い間に一斉授業の教授・学習文化に適合するように文化変容または同化 (acculturation) を起こしたのだと考えることができる。これ以外に、CAIの実施過程で、個別学習やその学習履歴を記録する機能に反するにも関わらず、教室での教え合いを奨励する使い方がなされてきたことも観察されている（大谷 1997b）。

このように、一旦は受容されたかに見えても、受容したテクノロジーの本質を長い間に骨抜きにしようするような使い方が実際に行われていることに注目する必要がある。

#### 6. おわりに - 「神々の微笑」モデルの克服と新たな教授・学習文化の創造の必要 -

このことは、芥川が描く、異文化を吸収して独自のかたちに変容させる日本文化のあり方と酷似している。ただし筆者は、これを日本に固有とは考えない。前述のように米国の公立学校でもインターネット利用はあまり成功しておらず、逆に両国のフリースクールでは成功しているからである。問題は受容側の文化的文脈の高さであろう。したがって教授・学習文化が現在のままであるならば、インターネットが教室で有効に活用される可能性はきわめて低い。Cuban(1986)が指摘するように、教室にテクノロジーが入る時の門番は教師である。この問題の克服に必要なことは、このような教授・学習文化の潜在的な諸特性を明るみに引き出し、それらの一部を、教師を含む幅広い合意のもとに意図的に解体し組み替えて、新たな教授・学習文化を創造していくこと以外にないと考える。

#### 文 献

- Cuban, Larry(1986) Teachers and Machines: The Classroom Use of Technology since 1920, Teachers College Press, New York  
大谷 尚(1997a)インターネットは学校教育にとってトロイの木馬か - テクノロジーの教育利用と学校文化 - 『学習評価研究』29, 1997, 42-49  
大谷 尚(1997b)『質的研究法による授業研究 - 教育学・教育工学・心理学からのアプローチ - 』（平山満義編）北大路書房  
大谷 尚(1998)インターネットの教育利用における予期しなかった結果に関する一考察 - 教育関係者のメーリングリストへの海外からの不適切な要求のメールの事例をとおして - 『名古屋大学教育学部紀要 - 教育学 - 』45(1), 99-112  
大谷 尚(2001)情報化時代の教育と教育課程のあり方 - 新たな学習文化を創造するために - 『現代カリキュラム研究』（山口満編）学文社